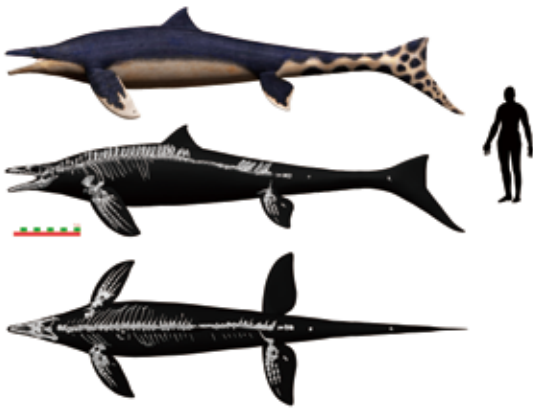


## ワカヤマソウリュウの世界的重要性

(11ページからの続き) 鳥屋城山で発見されたモササウルス類の化石は、学名を「メガプテリギウス・ワカヤマエンス」（和歌山滄竜）と名付けられました。これは、ギリシャ語で「和歌山から産出した大きい翼」を意味しており、頭骨よりも長い翼のような大きい脚のヒレを持つという特徴から名付けられました。ワカヤマソウリュウは、尾を除くほぼ全身の骨格が発見されましたが、これは日本国内はもとより、アジアや北西太平洋地域では唯一の全身骨格化石という世界的にも重要な化石です。このような保存状態の良さから、これまで知られていたモササウルス類の化石とは大きく異なる特徴が数多く確認されました。

その一つが泳ぎ方です。これまでモササウルス類は、ヒレのある尾を左右に強く振ることによって泳いでいたと考えられてきました。しかし、ワカヤマソウリュウの脚のヒレは異様に大きく、肩甲骨付近も大きく発達していることから、現在のウミガメやペンギンのように、前脚のヒレを大きく使って泳いでいたと考えられます。

さらに、背骨の特徴からは、イルカのような背ビレが存在していた可能性が高いことも明らかになりました。これまで、そのようなモササウルス類は世界中でどこにも知られておらず、ワカヤマソウリュウの大きな特徴と言えるでしょう。また、頭骨の特徴からは、やや前向きに目が付いており、両眼で獲物を立体的に捉え、距離を測っていた可能性が指摘されています。頭骨は小さく、顎も華奢（きゃしゃ）であることから、大きな獲物を狙うような獍猛（どうもう）な性格ではなく、両眼視をいかして小魚を捕らえていたのかもしれない。このように、鳥屋城山で発見された化石は、従来から考えられていた以上にモササウルスが多様な進化を遂げていたことを示しており、その進化の歴史を解明していく上で欠くことができない極めて重要な世界的発見と言えるでしょう。



ワカヤマソウリュウ復元図  
写真提供：和歌山県立自然博物館